

- 2 [土]—3 [日・祝] 『不機嫌な女神たち プラス1』◎PLAT主ホール
- 2 [土]—4 [月・振] 高校生と創る演劇『転校生』
◎PLATアートスペース
- 8 [金]—9 [土] 劇団スーパー・エキセントリックシアター
創立40周年記念・第57回本公演 ミュージカル・アクション・コメディ
『ピースフルタウンへようこそ』◎PLAT主ホール
- 8 [金] オーケストラ ファン・ヴァセナル 室内楽シリーズ20
「イタリア・ヴァイオリン音楽の夜明け 17世紀初期から
コレルリへ、大いなる飛躍!!!」◎PLATアートスペース
- 10 [日] 公益財団法人豊橋市国際交流協会 設立30周年
記念式典・記念音楽会◎PLAT主ホール
- 10 [日] とよはしインターナショナルフェスティバル2019
◎PLATアートスペース ほか
- 14 [木] グロリアンピアノコンサート
はちまん正人ピアノ・トリオ・ライブ! ◎PLATアートスペース
- 17 [日] 第26回 三遠南信ふるさと歌舞伎交流 豊橋大会
◎PLAT主ホール
- 19 [火]—20 [水] 豊橋演劇鑑賞会 第275回例会
加藤健一事務所
『パパ、I LOVE YOU!—It Runs in the Family—』
◎PLAT主ホール
- 19 [火] □字ック 第十三回本公演『掬う』関連企画
「日常と舞台を繋ぐ演劇ワークショップ〜コミュニケーションを
通じて自分に気付く〜」◎PLATアートスペース
- 20 [水] 佐藤こうじ 俳優のための音響ワークショップ
◎PLATアートスペース
- 22 [金]—23 [土・祝] □字ック10周年前夜祭企画!
第十三回本公演『掬う』◎PLATアートスペース
- 23 [土・祝]—24 [日] 劇団「第五会議室」
『最後の昔ばなし』◎PLAT主ホール
- 25 [月] 志の輔一門 立川志の太郎 独演会◎PLATアートスペース
- 28 [木] 0才からのジャズコンサート ◎PLATアートスペース
- 29 [金] プラットワンコインコンサート2019 白井那奈&高柳満理奈
『ピアノの調べ〜バロックから近現代へ〜』◎PLATアートスペース
- 30 [土] 笑いの学校 第12回例会 成田家紫蝶&
じゃんたら娘◎PLATアートスペース

- 1 [日] ブラヴィッシモ コンサート◎PLATアートスペース
- 5 [木] 喜多三特別ライブ in 豊橋 ~古閑裕和と妻金子~ ◎PLAT主ホール
- 8 [日] 第1回 ダンススペースNYC 豊橋発表会◎PLAT主ホール
- 10 [火] CARM主催 防災シンポジウム「巨大地震と台風の複合災害に備える〜伊勢湾台風から60年」◎PLAT主ホール
- 13 [金]—15 [日] PLAT 小劇場シリーズ 穂の国とよはし芸術劇場 PLAT プロデュース『荒れ野』◎PLATアートスペース
- 15 [日] 第3回 東三河ジュニアスポーツ勉強会◎PLAT主ホール
- 17 [火] 大学・短期大学・専門学校 進学ガイダンス◎PLATアートスペース
- 20 [金]—22 [日] 『ドクター・ホフマンのサナトリウム〜カフカ第4の長編〜』◎PLAT主ホール
- 21 [土] 松本千明バレエスタジオ おさらい会◎PLATアートスペース
- 22 [日] 第11回 小春風ライブ◎PLATアートスペース
- 25 [水] 高校生ボランティアハートネットワーク 報告会ならびに交流会 ◎PLATアートスペース
- 26 [木] プレスコの会 発表コンサート ◎PLATアートスペース
- 27 [金] 2019 ゆかり会 Petit Concert◎PLATアートスペース

表紙/「荒れ野」撮影:伊藤華織
裏表紙/「転校生」撮影:萩原ヤスオ
企画・発行/公益財団法人豊橋文化振興財団
編集・デザイン/味岡伸太郎+有限公司STAFF
令和1年10月発行 40号[隔月発行]



TOYOHASHI ARTS THEATRE
PLAT

表紙:「荒れ野」

2

INTERVIEW:1 「荒れ野」もっと愚かなもがき方もしてほしい。 桑原裕子

4

INTERVIEW:2 「掬う」ようやく書けた家族。 山田佳奈、佐津川愛美

6

INTERVIEW:3 「ドクター・ホフマンのサナトリウム〜カフカ第4の長編〜」
アウトサイダーにしてトップランナー。ケラリーノ・サンドロヴィッチ

8

PURA PURA バロコの寄り道ぶらぶら 野村萬斎×桑原裕子

10

INTERVIEW:4 高校生と創る演劇「転校生」

公益財団法人
豊橋文化振興財団情報誌
2019年11月-12月

vol.40



TOYOHASHI
ARTS
THEATRE
PLAT



12

INFORMATION PLAT 主催公演情報

14

FOYER 平田オリザが語る「転校生」

15

SUPPORT TICKET CENTER

裏表紙:「転校生」

PLAT CALENDAR

『穂の国とよはし芸術劇場プロデュース「荒れ野」』

無謀な恋とか届かない夢とか
もつと愚かなもがき方もしてほしい。
桑原裕子

作・演出

——「荒れ野」が2年ぶりに再演されます。初演時、平田満さんから「劇団ではできないことをやってみては」と提案があったそうですが、ご自身としてはどのように取り組まれた作品だったのでしょうか。

桑原—— 劇団だと、どんな話を書きたいかよりも、劇団員全員を出演させるという命題が先行してしまうのですが、「荒れ野」はキャストが6名なので、人数的な責任から解放され、いい意味で無計画にできるという感覚がありました。結果的に、作品の筋ではなく芯を追っていくような、深い掘り方になったと思います。

—— 女性二人を軸にしつつ、男たちの物語でもあります。

桑原—— これまでもそうでしたが、「こんな男がいるからそんな女になる」「こんな女に愛される男はこうだ」というように、男性から女性、女性から男性を“反射”させながら描いていきましたね。

—— 「荒れ野」は悲劇喜劇賞、読売文学賞を受賞しました。多数の評価、批評を得たことで、作品について新たに発見したことはありましたか？

桑原—— 自分では特に意識していませんでしたが、家族という形式に対する疑いみたいなものがあって、ストーリーの中に疑似家族を形成していく傾向があるんだなと。また、登場人物が抱えている悩みや本質的な訴えが徐々に出てくるところを、チューホフを引き合いに出して論じてくださる方もいました。確かに30代までは強い女が書きたかったので、言いたいことを女たちがどんどん口に出すと言うものを書いていたんですけど(笑)、年を重ねるごとに、「本音ってどうも言えないんだな」「しょうがない」って解釈もあるんだなと自覚したり、昔は言葉を駆使すれば相手に思いが伝わると思っていたんですが、口に出した途端に本当に言いたかったことが霧散することがあると気付いたり……。会話劇を描いていても、セリフを疑っているところはあります。

—— 近年の桑原作品には、ご自身より上の世代の、老いや孤独を描いた作品が増えています。上の世代について書くときに意識していることはありますか？

桑原—— ずっとモデルにしているのは自分の母と、母とは全くタイプが異なる叔母の2人で、私が書く作品の中には必ずどちらかがいます。また子供の頃からおじさんの友達が多かったんですが、「元気？」って話しかけると「なんとか生きてるよ」と返されて、「大人ってこんな気持ちになるの？」と、大人の喪失感とか虚無感に触れてしまったことがずっと忘れられなかったんです。と同時に

に、本人たちは純粋な気持ちでも子供には怖がられてるよっていう目線も持ち続けていたいし、その一方で、母が父に対して感じることは私の恋愛の中にもあることだったりするので、結局、世代の違いは大きな問題ではないのではないのかも、と思います。

—— また「荒れ野」初演時に桑原さんが、自分より下の世代に対して“私たちの世代以上に未来を荒野と感じているのではないか”と危惧されていたのが印象的でした。

桑原—— 下の世代について寂しいと思うのは、慎ましいと言うか、欲を持たずに生きていこうという感じが強いこと。無謀な恋とか届かない夢みたいなものに、自分はずっともがいてきたけれど、今は身の丈に合った生活でヨシとしなきゃという感じがある。なので、私が書くときは現実の若い人をそのまま写し取るのではなく、もつと“愚かなもがき方”もしてほしいと希望を込めて書いていくところがあります。

—— 近年、夫婦別姓や同性婚など夫婦を巡る多様な問題が顕在化し、女性の生き方も大きく変わってきました。

桑原—— 最近思うのは、帰属意識のこと。例えば一度結婚したらずっと一緒にいて、同じ家に帰ることを美德とする感じがいまだにあると思います。それは経済的な問題とか、実際に離婚手続きに手間がかかるといった現実的な問題もあるかもしれないけれど、それだけではなく、自分が所属しているものから外れた瞬間に、自分の価値が暴落するという幻想があるんじゃないかと思っていて。そういう家族のあり方に疑いをもちつつも一人ではいられない人たちを描いたのが6月にKAKUTAで上演した「らぶゆ」でした。

—— 震災以降、フィクションが描きにくくなったと言う劇作家は多いですが、桑原さんはオリジナルストーリーにこだわって創作されてきました。桑原さんを突き動かすものは何なのでしょう。

桑原—— 20代の頃、ヤクザの話を書こうと思って、新宿の花園神社でテキ屋の取材をしたことがあるんです(笑)。でも私は、テキ屋の仕事よりもただ1日中ぼーっと店番している、16歳くらいの男の子のほうに気になってしまっ。その子はそれまで一体どんな人生を歩んできたのか……私がどんなに丁寧に取材して書いたとしても、その子の人生の重みは超えられないと思いました。なので、フィクションにこだわっていると言うよりも、私の場合は人間から物語が生まれてくる。私の創作の起点は、あくまで人なのかもしれません。取材・文：凛

撮影：伊藤華織

桑原裕子[くわばら・ゆうこ]／東京都出身、KAKUTA主宰・作・演出・俳優。高校時代に平田オリザ演出『転校生』で女優デビュー。劇団外でも、福原充則演出『俺節』や人気劇団などへ多数出演。11～13年までブロードウェイミュージカル『ピーターパン』の潤色・作詞・演出を担当。脚本家としては舞台・映像・ラジオ・ノベライズ小説・ゲームシナリオと様々な分野に脚本を提供。09年KAKUTA『甘い丘』再演で第64回文化庁芸術祭・芸術祭新人賞(脚本・演出)を受賞、14年KAKUTA『痕跡(あとあと)』にて、第18回鶴屋南北戯曲賞を受賞。2018年4月より穂の国とよはし芸術劇場PLAT芸術文化アドバイザーに就任。穂の国とよはし芸術劇場PLATプロデュース『荒れ野』にて、第5回ハヤカワ「悲劇喜劇」賞、第70回読売文学賞戯曲・シナリオ賞受賞。

12月13日[金]19:00開演
12月14日[土]13:00開演／18:00開演
12月15日[日]13:00開演

作・演出＝桑原裕子
出演＝平田満、井上加奈子／増子倭文江、中尾諭介、多田香織、小林勝也
会場＝PLATアートスペース

PLAT小劇場シリーズ
穂の国とよはし芸術劇場PLATプロデュース

荒れ野

いつの間に私たち
こんなところまで来てしまったの

矢作—— まずは、□字ヅクの10周年前夜祭企画についてお伺いできますか。

山田—— 10年同じことを続けるのは、大変なことだと思うのですが、10には満たない9という数字だから完成はしてない。次の段階に向かっていく上で、よくここまで来た、いろいろな経験も積んで、これだけのことはできるようになったねという、静かな祝杯というか、一人で居酒屋で飲んでいる時間を楽しむような公演になればいいなと思っています。

矢作—— 今回の作品の『掬う』ですが、これは家族の話と言ってよいのでしょうか。

山田—— 今まで家族の話を描くという現実味がなかったんです。自分よりも年齢が高い方々の正義とか現状を描いて受け止める自信もなくて。□字ヅクにお客さんが求めているものと、家族の話や、どのように劇団に着地させていくか、想像がつかなかった。でも、30半ばになって、私生活でも演劇人としても変化を経て、書きたい題材もあったので、ようやくそれがクリアになり、チャレンジできるようになりました。

矢作—— 主演の佐津川さんには、どういった点を期待して出演を依頼したのですか。

山田—— ずっと好きで、いつか一緒にという思いがあったんです。□字ヅクの登場人物は、自分のことばかり主張する人や、意地悪な人とか、ストレートでない人が多い。主人公はそれに対して右往左往するけれど、それを越えた時に見える新しい世界や視点の先に美学を感じ、それを一緒に作っていつてくれる人がよく、それが佐津川さんとはできる気がした。お芝居に対してすぐ真摯に向き合うし、私は職人と思っています。器職人として、ショッピングセンターに安い器を出すこともできれば、ていねいに漆を塗った器を出すことができる。だから、この新しい「家族」に挑戦する作品で対等に戦ってくれると思ったんです。

矢作—— 今度は佐津川さんにお伺いしますが、出演依頼を「受けよう」と思ったポイントは。

佐津川—— まず先に『掬う』のオファーをいただいていたのですが、それとは別に山田さんから初長編監督の映画のオファーもいただき、そのスケジュールがちょうどよいタイミングで、先に映画に出演させていただきました。女の子がいっぱい出てくるお話して、私は基本的に女性が頑張っているのが好きなのですが、とにかく現場が楽しかったんです。映画でも演劇でも脚本に力

がないと、役者が作品に向かう姿勢は集まってこない。そういった意味では、その現場はみんなで「がんばろう」という思いがすごくありました。主演で出演させていただくと山田さんがどういう作品を撮るのか、どういうものを書くのかもわからず、台本もない状態では「はい、やります」と言いにくいのですが、今回のようにお仕事がハマっていくことも、縁だと思えます。いろいろなことが一気に動く時があり、お互いに引き寄せたのだと思います。

山田—— 映画の現場でも同じことを感じたのですが、信じてもらえているからこそ頑張りたい。がっかりさせたくないと思っています。俳優さんも私が脚本と演出をしている以上、そこに共鳴や理解と一緒に作ってくださると思います。ポジティブな意味で対等に戦わなきゃと思います。

矢作—— 佐津川さんは、映画やテレビなど映像だけでなく舞台も出演されていますが、映像と舞台の差はどういった所にあるとお考えですか。

佐津川—— デビューが映画だったので映画の現場が居やすいというか、ホームみたい。初舞台が二十歳で

佐津川愛美[さつかあ・あいみ]／1988年、静岡県生まれ。2005年の映画デビュー作『輝しくれ』でブルーリボン賞助演女優賞ノミネート。2007年には『腑抜けども、悲しみの愛を見せろ』でブルーリボン賞助演女優賞および新人賞にダブルノミネート。以後『鈍獣』『悪夢のエレベーター』などの映像だけに留まらず、舞台作品にも多数出演。

山田佳奈[やまだ・かな]／2010年3月に□字ヅクを旗揚げ。以降全ての脚本を手掛ける。元レコード会社社員・舞台演出家・脚本家・映像監督・俳優など、さまざまな肩書を持つ。2016年『夜、逃げる』で本格的に監督デビューし、2019年に自身の舞台作品である『タイトル、拒絶』を監督・脚本で映画化。東京国際映画祭2019

日本映画スプラッシュ部門にも正式出品が決定している。また、近年はNetflixオリジナルドラマ「全裸監督」脚本チーム参加、ABCテレビ・テレビ朝日『神ちゅーんず』全話脚本、舞台・吉本神保町花月しずる×□字ヅク『演劇♡顧問』脚本・演出・出演など外部作品への書き下ろしも積極的に行っている。

明日も頑張りましょうと、 ハイタッチできるような作品に なっています。

脚本・演出 山田佳奈、 出演 佐津川愛美

聞き手 矢作勝義 穂の国とよはし芸術劇場PLAT芸術文化プロデューサー



INTERVIEW:2

10年前ですが、まだお邪魔させていただいている気持ちがあります。舞台にはまる人と、はまらない人に役者は分けられると思いますが、私も1回嫌いになった時期があったんです。それを克服して、最近は「舞台も楽しいな」と思えるようになりました。役者としての修行という意味合いもありますね。舞台では役者として楽しめる部分がある。「10ではない、9」も私らしいし、この10年間の舞台とは違う新しい感覚が広がり、今回の役も今だからできる、そういうタイミングかなと思いました。

山田—— 映画監督としても活動しているけれど、ホームはやはり演劇。実家がいつまでたっても変わらないように、演劇で育ったから、実家の土地に建てた家が□字ヅクという劇団だから、そこを大事にしていきたい。今までもタイミングがあれば豊橋や大阪などにも作品を持って行きたかったのですが、今回実現できてうれしく思っています。映像でも舞台でも、ようやく好きなことをやらせてもらえるようになってきた。

前回豊橋で上演した『荒川、神キラーチューン』で、セリフの速度を東京基準でやると、お客様の反応として

流れていく感じがあった。それでセリフの速度を落とすと、客席への伝わり方が変わった。豊橋と東京の速度は少し違う、じゃあ大阪だったらどうなるのか。一つ先に進むために地方に回っていくことに興味がある。そういう意味でも、私にとって豊橋は第二の実家です。

矢作—— 最後に山田さんに、豊橋のお客さんに、今回の作品をアピールしていただけますか。

山田—— 豊橋は、近藤芳正先輩と行った市民劇でまずお世話になりました。あの公演の時、とにかく皆さんから人生相談をされた覚えがある。旦那と別れよう、息子とうまくいっていない、親と折り合いがつかないとか。東京からみればこんなにギスギスしていない街に住んでいても、生きづらい部分があるのだなと思った。そういうのを受け止めて私は作品作りをしているから、そういう方々にこそ観てほしい。明日も頑張りましょうと、ハイタッチできるような作品になっています。豊橋の人が劇場に長蛇の列をなしてハイタッチをしに来てくれるといいなと思います。映画も舞台も、晴れの日のものではなくて通常の日にこそ観て元気もらえる。そんな劇場体験をしていただきたいと思います。

矢作—— ありがとうございます。



11月22日[金]19:00開演
11月23日[土・祝]13:00開演
17:00開演
脚本・演出＝山田佳奈
出演＝佐津川愛美／山下リオ
馬淵英里何／日高ボブ美
水野駿太郎、大竹ココ、東野絢香
大村わたる／古山憲太郎
中田春介、千葉雅子
会場＝PLAT アートスペース

わたしたちは当たり前他人を傷つけることができる。
それをどこで許すか、それが大人になることだ。

PLAT小劇場シリーズ
□字ヅク10周年前夜祭企画!第十三回本公演

掬う

アウトサイダーにしてトツプランナー。ケラリーノ・サンドロヴィッチ

カフカの「捏造」です。カフカの世界に近づこうとしながら、新作を書きました。作・演出

矢作—— KERAさんはこれまでもカフカを取り上げてこられました。2001年の『カフカズ・ディック』(オリガノ・プラスチック)はカフカを主人公に評伝的に、2009年の『世田谷カフカ』(ナイロン100℃)はカフカの作品をコラージュ的に、そして今回は、実際にはない遺作を元にするということですか。

KERA—— そうです。カフカの「作品の捏造」です。「今回の作品はカフカっぽいよ」だけでも良かったんですけど、もう一つひねくってみようかなと。宣伝など誤解を招きかねない、ややこしい企画ですが、面白いかなと思いました。

どうしてこれほどカフカに執着するのか、自分でも分からないんですよ。巨匠にこんなことをいうのもなんですけど、シンパシーを感じています。カフカは「絶望名人」と呼ばれるほど、自分に自信のないところが魅力的。彼は決して不条理なものを書こうとしていたわけではなく、カフカの目にはこう映っていたのだと思います。社会を諷刺しようとかそういう気も全くない。諷刺はいかにカモフラージュされていても、諷刺の方向とありかを示す矢

印が随所に埋めこんであるものです。一方、カフカの場合、いかなる結論も、方向も、性格も打ち出さない。一切が曖昧のまま終始して、あちこちを向いた矢印が残されているだけ。そういうところがとても面白いですね。

矢作—— チラシのメインビジュアルの多部未華子さんの写真が印象的です。

KERA—— 長編も4作目となると一実際は書かれてないわけですが(笑)ーカフカなりの新しい挑戦があつて然るべきじゃないかと。まずカフカの作品に女性を主人公(中心)にしたものはないのです。そしてカフカらしからぬタイトルにしました。カフカの作品ってほとんどタイトルが無くて、後からつけられたんですよ。カフカが新しくやろうとした事って何だろうと考えるのも楽しいですね。小説は暗いトンネルの中を通るようにして書かれなければいけない。登場人物がこれからどうするかなんて作者が知っているわけがない。何が常識なのか、そのこと自体を疑って掛からなければいけない。そうしたカフカの持論には心からうなずけます。例えば俳優さんへのオファーする時には、最低限でもプロットをお渡しし

て「あなたはこういうポジションです」と伝えるというルールがあると思うんですが、僕はプロットを立てたことがない。作家として恥ずかしいというか、台本を書く前に計算が見えてしまうことに赤面してしまうんです。そんなことが続いたら三四十何年です。

矢作—— 出演者の方たちへのオファーはどういったところからでしょうか。

KERA—— 多部さんは普通の女優さんと違うという言い方も失礼ですが、非常に個性的だと感じました。彼女ならではの価値観を匂わせてくれる点でしょうか。今回出演してくれた理由が、一度僕の作品に出てみた方が良いと周囲から言われたので。瀬戸君は、『陥没』という作品に彼が出演してくれた時、とても良くて。それで相談して決まったのです。

矢作—— 渡辺いっけいさんが豊川市の出身で、地元でも非常に期待が高まっています。

KERA—— それはとても良かったです。

矢作—— 音楽や映画の映像も作られますが、さらに時間と労力がかかる演劇を勢力的に続けてこられた訳は。

KERA—— 映像だったらOKテイクを撮れば監督も俳優もそのシーンに関しては終わりで、残りのシーンを撮れば終了と、どんどん残量が減っていく。終わったものに関しては、どんなに後悔しても諦めるしかない。演劇は千秋楽まで体調管理し、テクニカルな部分もチェックし、それを毎回毎回繰り返していく。大変だけどそこが面白いし、なかなかうまく行かないことも面白い。一個一個直しても、新しいほころびが見えたり、出来ていたことが出来なくなったりという、生身の人間を相手にしている面白さ。それが多すぎるとイヤにもなることも正直ありますけどね(笑)。そして、同じことをやっても空間によって見え方、伝わる音、受け取り方がすべて変わる。でも杓子定規にマニュアルができあがって、「この劇場でやるときはこうだからこれでよろしく」とはならない。毎回作

品も違うし、役者も違う、それがとても面白い。僕の場合、作風も敢えて統一せず、様々なことに挑戦し、真剣に半分遊んでいるみたいところはありますね。

矢作—— 今回、神奈川、兵庫、北九州、豊橋でツアー公演ですが。

KERA—— 全部同行します。外国の演出家みたいに初日が開いたら帰るのは心配で仕方ない。3、4ステージ間を空けると、俳優自身はブレていないつもりでも、いつの間にか細かいところがブレてくる。見ないうちにこんなに変わっちゃったかと、たまにビックリします。地方公演では劇場入りすると場当たり、色々な変更点を確認し、初日を見て、だめ出しをして、その辺りで仕事の都合で帰らなきゃ行けないこともあります。

矢作—— 会場ごとにチューニングをし直すのですよね。

KERA—— そうですね。あと、多分僕は日本で一番騒音、というからよつとしたノイズにうるさい演出家なんじゃないかな。例えば日本で「静寂」とト書きがあるとき、理想はすべての電源が切られて劇場から帰るときの静かさ。これに極力近づきたい。でも大抵空調などの音がしている。環境音やノイズだけでなく、台詞にしろ、音楽にしろ、音には敏感かもしれない。でも、拘らない部分は本当に拘らなくて、例えばステージングは小野寺修二さんに任せっきりの場合もあります。

矢作—— 今回、音楽は鈴木光介さんらの生演奏が入りますね。動きあり、音楽あり、そして衣装も楽しみです。

KERA—— 小野寺さんにせよ、光介にせよ何度も一緒にやってきた人なので。今回みたいに、演技以外の要素が多く、セクションが多いお芝居は大変だけど楽しいですね。女優さんは衣装で結構モチベーションが上がったりします。といっても所詮カフカなので、そんなにきらびやかにはならない。

矢作—— KAAT公演の後、豊橋が大千秋楽になります。最後まで乗りきっていただき、豊橋でお待ちしております。

ケラリーノ・サンドロヴィッチ／1963年東京都生まれ。82年、ニューウェイヴバンド・有頂天を結成。自主レーベルであるナゴムレコードを立ち上げる。並行して85年に劇団健康を旗揚げ、93年にナイロン100℃を始動。99年、『フローズン・ビーチ』にて第43回岸田國士戯曲賞受賞、現在は同賞の選考委員を務める。KERA・MAPなどのユニットも主宰するほか、チューホフ四大戯曲全四作品の演出にも取り組んでいる。映像活動では映画『グミ・チョコレート・パイン』『罪とか罰とか』など。音楽活動ではケラ&ザ・シンセサイザーズ、No Lie-Sense、有頂天など、ソロ各ユニットにて展開中。19年5月、新作ソロアルバム『LANDSCAPE』をリリース。近年の受賞歴として、18年・秋の紫綬褒章受章2019年・第26回読売演劇大賞最優秀作品賞(ナイロン100℃「百年の秘密」)／優秀演出家賞(「百年の秘密」、KERA・MAP「修道女たち」演出)など。

INTERVIEW:3

12月20日[金]18:30開演

12月21日[土]13:00開演／18:30開演

12月22日[日]13:00開演

作・演出＝ケラリーノ・サンドロヴィッチ

出演＝多部未華子、瀬戸康史、音尾琢真ほか

会場＝PLAT主ホール

ドクター・ホフマンのサナトリウム

～カフカ第4の長編～

カフカ4作目の長編小説の遺稿が発見された!?
誰も知らない「カフカ未発表長編」を舞台化。

桑原—— 狂言師としてもともとやっていたらして、俳優も、もちろん舞台もお忙しくされて、どのように知恵をインプットしながらそれをアウトプットされていくのでしょうか。

萬齋—— 狂言については学ぶというより、3歳の頃からプログラミングされている狂言サイボーグという意識もあります。大きいのは、文化庁の芸術家在外研修で、イギリスに1年間行ったことです。その時に、芝居も観たし、コンプリシテのワークショップにも出たし。RSCでは稽古を見たり、町のコミュニティや、RADA(王立演劇学校)に教えに行ったり、ダウン症のカンパニーに狂言のワークショップをしたりと、様々なことをしました。27～8歳で、狂言の修業がある程度できており、求められることと、教えるべきことと、教えなくてもいいこと、舞台芸術の共通語は共通語として共有し、逆に非共通語が僕らの個性だなと、いろんなことを相対化できたのです。

桑原—— 幼い頃の集積に、さらにまたプログラミングが重なっていったんですね。

萬齋—— やはり職人的なところがあり、やっていることを言葉に直せないと人に伝えられず、人にやらせられない。それをアウトプットできる言葉を獲得するために、役者をやりながら、蛭川さんや栗山民也さんの演出方法の違いを考えたりしました。

桑原—— 最後に、昔も今も変わらず大事にしていることをお聞かせいただけませんか。

萬齋—— どうしてもあれわれは発信するだけに終わりがちなので、それを改め、作った限りは大事にし、最終的には社会還元していくということが、公共劇場として重要だと思います。レパトリーを作り、それを全国に展開して、文化的発信力を持ち、そして皆さんを喜ばせる。世田谷での『マクベス』が海外公演し、好評を得たことで、区民の方に、「うちの区には野球チームやサッカーチームはないけど、世田谷パブリックシアターがある」と言われたことが、一番うれしかったです。でも、やはり人を脅かさないとつまらない。それは現代性というか、即時性。普遍とか古典と言っていると、ありきたりになりかねないので、そういう表裏一体なことを、二律背反を同時に行うことが、苦しみであり醍醐味だと思います。世阿弥も「秘すれば花」「珍しきが花」と残していますね。

桑原—— 古典と現代性、その両面が備わってるのが萬齋さんなのだとわかりました。オリンピックも、演劇も、狂言も、映画もやり、それで驚かしていることが素晴らしい。

萬齋—— でも、どこかでまた崩すとか、新しい人を入れないといけないし、新しい驚きがなければいけません。後進の芽があればチャンスを与えなきゃいけないし。そういう窓口になれたらと思います。それこそ世田谷を登竜門だと思ってください、世田谷区に行くのが一番素敵だなとなりたし、その意味で世田谷や、PLATは劇場の物的ではないところで勝負するという、質を問う根源的な演劇行動に出会うというところがいいと思います。

桑原—— 仰ることをご自身の体で実際に見せておられる方だなと改めて思いました。今日は本当にありがとうございました。

オリンピックも、演劇も、狂言も、映画もやり、それで驚かしていることが素晴らしい。

野村萬齋

桑原裕子

世田谷パブリックシアター芸術監督 穂の国とよはし芸術劇場PLAT芸術文化アドバイザー

PURA PURA
バラコの
寄り道
ぷらぷら



野村萬齋[のむら・まんさい]
／1966年生。祖父・故六世野村万蔵及び父・野村万作に師事。重要無形文化財総合指定者。東京芸術大学音楽学部卒業。「狂言ござる乃座」主宰。国内外で多数の狂言・能公演に参加、普及に貢献する一方、現代劇や映画・テレビドラマの主演、舞台「敦一山月記・名人伝」「国盗人」「子午線の祀り」など古典の技法を駆使した作品の演出など幅広く活躍。各分野で非凡さを発揮し、狂言の認知度向上に大きく貢献。現代に生きる狂言師として、あらゆる活動を通し狂言の在り方を問うている。世田谷パブリックシアター芸術監督。東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会開会式・閉会式のチーフ・エグゼクティブ・クリエイティブ・ディレクター。

桑原—— 萬齋さんは佐藤信さんから引き継ぐ形で世田谷パブリックシアターの芸術監督をされたのですね。

萬齋—— そうですね。信さんや、プロデューサーが作ってきた劇場の色合いに僕も憧れていたのでお受けしたのですが、とはいえ僕は古典芸能の人間ですから、それなりの個性は入れた方が良くと信さんに肩を押していただきました。

桑原—— 信さんから引き継ぎ、ご自身の個性を出すことを考えた時に、萬齋さんのオリジナルの作品を定期的に上演することなどは考えましたか。

萬齋—— プログラムを作るときも、伝統芸能の価値観を多少なりとも注入していくということです。伝統芸能には、家の家業という部分と、個人のものであり、かつ国の文化として引き継ぐという縛りがある。公共的な発想が必要だし、考えざるを得ない。例えば海外公演ですが、普通だったら私の個性としていきますが、僕は文化を背負った使節みたいなことにもなります。

桑原—— 私の場合は、演劇人というジャンルで私らしさを考えればいいのですが、狂言師としてやってきたことも踏まえて、また背負い方も違うのでしょうか。

萬齋—— 文化を背負うと言うとなんか大袈裟な話だけど、やはりいろいろなやり方があるし、いろいろな方がいます。鈴木忠志さんは芸術監督の走り、腕力と言うか、思想性から入って、行政と巧みに組んで一種の町を作るみたいな政治性が強い、蛭川幸雄さんのようにとにかく魅力的で面白ければお客様を呼べる、という人もいます。私のように伝統芸能からの人間もいる。宮本亜門さんも、白井晃さんも、串田和美さんもやられていて、公共劇場でもいろいろな形がありますね。

桑原—— 萬齋さんが世田谷に来られ、いろんな企画を幅広くやられて、若手演劇人の登竜門みたいな場所も設けてくださり、私たちの成長に繋がる場所がありました。やはり萬齋さんが劇場の顔になっていることは大きいと思います。

萬齋—— 僕とすると、狂言だけに縛られないので、楽しみながらやらせて頂いています。世田谷の色と、形がしっかり固まっていたので、僕は大きく目を配りながら、もうちょっとあとこにこういう工夫したらいいとか。伝統的なものは数百年やってきた技術や工夫の集積で、いろんな知恵が付いています。例えば同じ集団でずっとやっているの伸び代がなくなると思えば、アングラの川村毅さんの脚本・演出に大女優の麻実れいさん。そして当時、無名の新人だった長谷川博己君が一緒だった「現代能楽集I『AOI / KOMACHI』」を企画する訳です。また、川村毅さんに、笠井勲さんという舞踏の人を入れて、非言語的のものを考えましよう。能楽の中には非言語的な要素も必要で、そういう伝統の知恵でスクランブルしていくところから始めていくことで、海外公演を含めていいスタートが切れました。僕が狂言という伝統的な知能集積の一部としての普遍的な発想があり、海外に行っても通じる要素として、この方がいい、と、芸術監督として勧めています。

山本タカ[やまもと・たか]／1988年生まれ。愛知県豊橋市出身。くちびるの会代表。2014年、くちびるの会を立ち上げ。以降、全ての作、演出を手掛ける。ささやかな日常を大仰な空想で飲み下すようなファンタジー作品を創作。劇団での演劇上演活動と並行し「吉祥寺シアター演劇部2016」の講師をはじめ、青少年を対象とした演劇ワークショップ活動や、新潟県長岡市表町小学校6年生による学校史演劇『町校物語』の脚本を担当するなど、児童対象の演劇創作活動も行う。

菊池佳南[きくち・かなみ]／桜美林大学演劇専修卒業。文学座の高瀬久男氏らに師事。2010年より平田オリザが主宰する劇団、青年団に入団。『銀河鉄道の夜』『アンドロイド演劇さようなら』等、平田作品をはじめ国内外での舞台に出演。後に、うさぎストライブにも所属。2016年に出演したミナモザ『彼らの敵』は第23回読売演劇大賞作品賞を受賞。震災後、東北に纏わる文学作品の朗読や学校現場等での演劇の手法を用いたワークショップも行っている。

北澤美未子[きたざわ・ふみこ]／明治大学在学中より、小劇場を中心に制作者として活動を開始。DULL-COLORED POPなどの劇団専属制作を経て、2012年より、有限会社ゴーチ・ブラザーズに所属。以降、制作・プロデューサーとしてさまざまな公演を経験。2014年、くちびるの会設立より、同劇団の制作代表・演出補佐を務め、山本タカ作品において、対外的・内外的な役割を担っている。今回、初めての豊橋滞在にて、高校生等との創作に胸を躍らせている。

INTERVIEW:4

こえてくる。それをそのまま舞台に乗せられればと思います。課題は、同時多発会話をどう考えていくか。辛抱強くやらないと足元をすくわれる。ただ、機械的に処理したり、それだけに目を向けていると、25年前のオリザさんに追いつけない。それをクリアしたのちに、生きている高校生を舞台に乗せてお客さんに届けるのが、大切な作業だと思います。

菊池—— 若いし飲み込みが早いし、すごく真面目なメンバーが集まっています。その一方で、普段の演じていない時の良さや、個性が面白く舞台上に出てきたらいいなと思う。

北澤—— 『転校生』という戯曲を、実際の高校生で立ち上げることができるということで、彼らが持つ輝きが舞台に現れるのではないかと期待と、最後に何かみんな一つのものをつかめたらいいなと思います。

矢作—— 最後に、豊橋の皆さんにお伝えする言葉をお願いします。

山本—— 僕は今30歳。オリザさんも30歳ぐらいで高校生と一緒に創った。今、同じ状況がある。この戯曲はものすごい力を持っているから、演劇的な野心は捨てきらず、また、変な邪念を持たずに初日を迎えようと思います。彼らの魅力や面白いところを、初日開けてお客さんに満を持して裸で投げかけられる作品にしたいと思います。

矢作—— ありがとうございます。

の喜びでした。私自身も今作の創作の場に関われるということが決まり、とてもわくわくした気持ちで最初のオーディションの日を迎えたことを覚えています。『転校生』の実際の創作に向かって、高校生のみんなが真っ直ぐに創作に向かっていく姿が印象的で、一緒に同じ目標に向かって走っていく、と思っています。

矢作—— ワークショップをやってみて、今回の参加者である高校生たちの印象は。

山本—— 若者文化としてメディアで取り上げられるより、素朴な子が揃い、真面目で結構緊張しいですね。もっと気軽に、「タカさん」と呼んで欲しいが、なかなか呼んでくれない。だけど友だち同士になるとすごく元気なグループと静かに話しているグループがあり、コントラストとして面白い。

北澤—— とっても一生懸命で、頑張り、良い作品にしよう、というポジティブな気持ちが全面に出ているように感じます。

菊池—— 普段私が思い描く高校生は、もっとギャルや、暗い子などいろいろな子がいるが、ここに来ている子たちはノーマルにフラットに、何か学べることがあつたらすべてを吸収して帰りたいと、素直に現場にいる印象です。矢作—— 実際に作品を上演するにあたって、期待するポイントや課題はありますか。

山本—— 実際に台本を読んでもたら、役のキャラクターが本人の素質と相まって、面白い響きでセリフが聞

かもしません。

矢作—— 高校生と一緒にというオファーを受けた時に感じたことと、実際にやってみた感想はいかがですか。

山本—— 最初、オリザさんの『転校生』と言われた時には、「あ、きたな」という風には感じました。「これはだいぶ僕は変わらないといけない」「試練だ」と思いました。僕は虚構性の高い作品を創っているの、初演の『転校生』が、当時流行ったアンダーグラウンド演劇のアンチテーゼだとしたら、きつとアンダーグラウンド側に僕もいるので。中・高生をセンシティブに扱わなければならない意識と、そこは人間だし分かり合おうよ、がせめぎ合いながら、打ち解けて、距離感がわかってきた。『転校生』の戯曲も、ワークショップから読み始めたことで、高校生たちも一人一人が自分の言葉にして作品について考え始めました。彼らも思考する存在なのだと改めて認識し、対応が早いことを心強く思います。

菊池—— 山本タカさんとは「はじめまして」で、お話しをいただいた後にタカさんの上演動画をいただき、演出を受けた俳優さんに「たぶん唐十郎が好き」と聞いて、「なるほど」と思いながら、『疾風のメ』を観ていました。自分自身は、オリザさんの戯曲への向き合い方など、モヤッとしていたものが、言語化してはつきり持てる機会かなとも思いました。

北澤—— 学生時代から共に劇団をやってきた山本に、チャレンジする場を与えていただけたことがまず一番

矢作—— 演劇を始めたきっかけと今の活動を一人ずつお聞かせいただけますか。

山本—— 「くちびるの会」の山本タカです。豊橋で生まれ育ち、中学の生徒会でやった小芝居が楽しくて、時習館高校の演劇部に入りました。習い事などが全然続かない性格だったんですが、演劇だけは飽きずに24時間考えていられました。親に「せめて大学は出てくれ」と言われたのもあり、明治大学の演劇学専攻に入り、2014年に「くちびるの会」を立ち上げ、脚本と演出をやり、日常が瓦解したり、鬱屈とした世界を想像力で制覇したりと、虚構の翼を地べたから無理やり羽ばたかせ、へトへトになりつつ生きるというテイストの作品をやっています。

菊池—— 私は、「青年団」という平田オリザさんの劇団にいます。高校で入った演劇部で楽しくなり、ドンドンのめりこんだ。桜美林大学は「平田オリザという人が教授らしい」と教えてもらって入り、制作をやりたいかったが、演じる方が楽しくなって、大学1年生の秋にオリザさんの作品に初めて出演しました。卒業して青年団に入って、今ここにいるという感じです。

北澤—— 中学時代に憧れた先輩がいて、その人の背中を追いかけて、演劇部に入りました。高校でも演劇部に入り、そのち、明治大学の演劇学専攻で学び、演劇を生業にしたい気持ちが芽生え、小劇場の世界に飛び込みました。今が一番、「演劇をもっと知りたい」「演劇でやれることをもっと考えたい」という思いが強い

豊橋出身、東京で活躍する劇作家・演出家 山本タカを演出に迎え上演する。

演出助手

演出助手

聞き手 矢作勝義 穂の国とよはし芸術劇場ROCK 芸術文化プロデューサー

山本タカ・菊池佳南・北澤美未子 高校生を語る。

11月2日[土]13:00開演／18:00開演
11月3日[日・祝]13:00開演／17:00開演
11月4日[月・振]13:00開演
作＝平田オリザ
演出＝山本タカ
出演＝オーディションで選ばれた高校生
会場＝PLATアートスペース

高校生と創る演劇

転校生

今を生きる、高校生達と一緒に
まっさらな気持ちで問いをおしてみる。

INFORMATION

PLAT主催公演情報

□字ツク10周年前夜祭企画!第十三回公演 『掬う』



佐津川愛美 山下リオ 馬淵英里何 千葉雅子

11/2 [土] 13:00開演 / 18:00開演
11/3 [日・祝] 13:00開演 / 17:00開演
11/4 [月・振] 13:00開演

好評発売中

高校生と創る演劇 『転校生』

公募による高校生出演者とスタッフが、劇場やプロのスタッフとともに上演する演劇の第6弾。「演劇批評の対象になる高校演劇を」という目標のもと書かれ、実際に劇評の対象となり、同時に若手劇作家の登竜門である岸田戯曲賞ノミネートの候補にまであがった劇作家・演出家・青年団主宰である平田オリザ氏の『転校生』を、豊橋出身の山本タカ(くちびるの会)の演出により、公募により選ばれた高校生キャストの出演、そして高校生スタッフが、劇場とプロのスタッフとともにお贈りいたします。
●作=平田オリザ●演出=山本タカ●出演=オーディションで選ばれた高校生●会場=PLATアールスペース●料金=[全席自由・日時指定・整理番号付]一般2,000円、U24(24歳以下対象)1,000円、高校生以下500円

11/8 [金] 19:00開演・9 [土] 13:00開演
劇団スーパー・エキセントリックシアター
創立40周年記念・第57回公演

好評発売中

ミュージカル・アクション・コメディー 『ピースフルタウンへようこそ』

三宅裕司、小倉久寛を中心に結成し、今年で劇団創立40周年を迎える今年も、社会性のあるテーマを扱いながら、総勢40名以上による笑い、ダンス、アクション満載のエンターテインメント作品をお届けします。●脚本=吉高寿男●演出=三宅裕司●出演=三宅裕司、小倉久寛、劇団スーパー・エキセントリックシアター●会場=PLAT主ホール●料金=[全席指定]S席8,000円、A席6,500円、B席5,000円ほか



穂の国とよはし芸術劇場PLATプロデュース『荒れ野』
写真:伊藤華織

託児サービス対象公演
要予約。生後6ヶ月以上。
お一人様 ¥500。お申込み、お問合せはプラットチケットセンターまで

マイセレクト4 対象公演
2019

二兎社43
『私たちは何も知らない』



朝倉あき 藤野涼子

11/22 [金] 19:00開演
11/23 [土・祝] 13:00開演 / 17:00開演

好評発売中

PLAT小劇場シリーズ □字ツク10周年前夜祭企画!第十三回公演 『掬う』

劇団、□字ツクの1年半ぶりの最新作『掬う(すくう)』。本作は、愛情の見返りを求める家族に疲弊する主人公が、「かつての友人」「父の知り合い」と名乗る女子高生との奇妙な共同生活を経て、他者を赦す過程を描く。●脚本・演出:山田佳奈●出演=佐津川愛美/山下リオ、馬淵英里何/日高ボブ美、水野駿太郎、大竹ココ、東野絢香、大村わたる/古山憲太郎、中田春介、千葉雅子●会場=PLATアールスペース●料金=[全席指定]【前売】一般4,200円、U24(24歳以下)2,800円、高校生以下1,000円【当日】一律4,200円

＜関連企画＞ 『日常と舞台を繋ぐ演劇ワークショップ』

～コミュニケーションを通じて自分に気付く～
11/19 [火] 19:00～21:00
『掬う』に出演する俳優3名がお贈りするコミュニケーションにフォーカスを当てた□字ツクの課外授業。演劇的なアプローチを通して、明日からの会社や学校生活で気づきが生まれるワークショップです。●講師=日高ボブ美、大竹ココ、水野駿太郎●会場=PLATアールスペース●対象=中学生以上(演技経験問わず)●参加費=500円●募集人数=20名(先着順)●申込方法=①申込書に必要事項を記入の上、窓口に持参かFAX(0532-55-8192)②劇場ホームページの専用申込フォームより申込み。

12/13 [金] 19:00開演
12/14 [土] 13:00開演 / 18:00開演
12/15 [日] 13:00開演

好評発売中

PLAT小劇場シリーズ 穂の国とよはし芸術劇場PLATプロデュース 『荒れ野』-豊橋公演-

団地の一室を舞台に描かれた小さな作品ながら、チェーホフの作劇術と舞台作り近く、最初は訳が分からなかったものが、物語が進むにつれ登場人物たちとの関係や、彼らの抱えている問題やその関係が徐々に分かってきて、やがて観客が引きつけられていく。人生の“真実味”なるものを実現した作品として、高く評価され、第5回ハヤカワ「悲劇喜劇」賞を授賞するとともに、戯曲が「第70回読売文学賞戯曲・シナリオ賞」を授賞しました。オリジナルキャストで豊橋および東京(下北沢 ザ・スズナリ)で再演いたします。●作・演出=桑原裕子●出演=平田満、井上加奈子/増子倭文江、中尾諭介、多田香織、小林勝也●会場=PLATアールスペース●料金=[全席指定]一般4,000円ほか
＜『荒れ野』-東京公演-＞

12/18 [水]～12/23 [月]
●会場=下北沢 ザ・スズナリ ●料金=[全席指定]一般4,000円、ベンチシート3,800円ほか

チケットの購入・お問合せ プラットチケットセンター

●劇場窓口・電話0532-39-3090(休館日を除く10:00～19:00)
●オンライン http://toyohashi-at.jp [24時間受付・要事前登録]

U24・高校生以下割引ご案内

ほぼすべての財団主催公演に、若い人にお得な料金を設定しています。
●料金=U24[24歳以下対象]:公演ごとに指定する席種の半額/高校生以下:一律1,000円
●購入方法=各公演の一般発売初日から窓口にて取扱い。
●その他=本人のみ1公演につき1人1枚。枚数限定。座席の指定はできません。要・入場時身分証明書提示。

新日本フィルハーモニー交響楽団 ニューイヤーコンサート



指揮=三ツ橋敬子 正戸里佳

小曽根真&児玉桃 スペシャル・コンサート



小曽根真 児玉桃

プラットワンコインコンサート2019 『ピアノの調べ～バロックから近現代へ～』



白井那奈 高柳満理奈

12/20 [金] 18:30開演
12/21 [土] 13:00開演 / 18:30開演
12/22 [日] 13:00開演

12月21日13:00のみ

『ドクター・ホフマンのサナトリウム ～カフカ第4の長編～』

アウトサイダーにしてトップランナーという、特異なポジションで日本演劇界を席巻し続けるゲラリーノ・サンドロヴィッチ(KERA)が、書き下ろし新作を上演!今回KERAが選んだ題材は、これまでも度々取り上げてきた彼が敬愛する作家・フランツ・カフカ。「失踪者」「審判」、そして遺作長編とされていた「城」に続く、カフカの4作目の長編小説の遺稿が発見されたとしたら!?それを舞台化されたとしたら!?誰も知らないカフカの未発表長編の舞台化にKERAが挑戦。彼のマジカルな想像力が幻視する、ありもしないカフカ作品の捏造。今年一番の話題作です!
●作・演出:ゲラリーノ・サンドロヴィッチ●出演=多部未華子、瀬戸康史、音尾琢真 ほか●会場=PLAT主ホール●料金=[全席指定]S席9,000円、A席7,000円、B席5,000円ほか●前売予定枚数終了:当日券については12月以降にお問合せください。

2020/1/13 [月・祝] 13:00開演
二兎社公演43

好評発売中

『私たちは何も知らない』

永井愛の作・演出による新作公演。明治44年、20代の女性5人が集まって雑誌「青鞥」を創刊した。雑誌作りという冒険を通して味わう高揚感や苦悩を描く青春群像劇。●作・演出:永井愛●出演=朝倉あき、藤野涼子、大西礼芳、夏子、富山えり子、須藤蓮、枝元萌●会場=PLAT主ホール●料金=[全席指定]S席5,500円、A席4,500円、B席3,000円ほか

2020/1/26 [日] 16:00開演

好評発売中

新日本フィルハーモニー交響楽団 ニューイヤー・コンサート

指揮に三ツ橋敬子を、ソリストに正戸里佳(ヴァイオリン)を迎えての、新日本フィルハーモニー交響楽団によるニューイヤーコンサートです。●指揮=三ツ橋敬子●ヴァイオリン=正戸里佳●演奏=新日本フィルハーモニー交響楽団●会場=ライブレポートとよはし コンサートホール●料金=[全席指定]S席4,500円、A席3,000円、S席ユース(24歳以下)2,200円、A席ユース(24歳以下)1,500円

2020/2/11 [火・祝] 16:00開演

小曽根真&児玉桃 スペシャル・コンサート

日本を代表するジャズ・ピアニスト小曽根真と、パリを拠点に国際的な活躍を展開する実力派ピアニスト児玉桃によるスーパードュオ。●会員先行=11月9日(土)●一般発売=11月23日(土)●ピアノ=小曽根真、児玉桃●打楽器=大場章裕、西岡まり子●会場=PLAT主ホール●料金=[全席指定]S席6,000円、A席4,000円、S席ユース(24歳以下)3,000円、A席ユース(24歳以下)2,000円

若手音楽家育成事業 プラットワンコインコンサート2019

「若い音楽家には活躍の場を、お客様にはより音楽を楽しめる機会を」と企画されたPLATオリジナルのワンコインコンサートです。500円で贅沢なひとときをお過ごしください。●会場=PLATアールスペース●料金=[全席自由・整理番号付]500円
11/29 [金] 14:00開演
『ピアノの調べ～バロックから近現代へ～』
白井那奈[ピアノ]・高柳満理奈[ピアノ]
2020/1/5 [日] 14:00開演
『フルートで起こす化学反応～トリオで奏する新たな響き～』
Trio Esters[トリオ・エステル]満吉香苗(フルート)、岡田薫子(フルート)、鈴木風香(フルート)●会員・一般発売=11月29日(金)
2020/3/19 [木] 14:00開演
『歌の翼に乗せて～3人の女たちの響宴～』
Lis[リス]波多野千夏(ソプラノ)、寛悠里(ヴァイオリン)、植田結衣(ピアノ)●会員・一般発売=11月29日(金)

好評発売中

ワークショップ・レクチャー まちと劇場の技技交換所

11/20 [水] 18:30～21:30
佐藤こうじ 俳優の為の音響ワークショップ
舞台音響の仕事の紹介と、演技と音の関係性を、プロの俳優を交えて行うワークショップです。●講師=佐藤こうじ(舞台音響家)、日高ボブ美(俳優)●会場=PLATアールスペース●対象=高校生以上で、舞台芸術に関心のある方、高校演劇、社会人劇団、アマチュアの俳優・スタッフの方●参加費=一般1,000円、高校生以下500円●募集人数=15名(先着順)

11/25 [月]・27 [水]・28 [木] 19:00～21:30 照明ワークショップ舞台照明技術講座(プランニング編)

「一番音響コンサートの照明プランを考える」
コンサートのプランニング～仕込みまでを体験・実践していただく講座です。●講師=池田俊晴(穂の国とよはし芸術劇場 技術部)●会場=PLATアールスペース●対象=高校生以上で、上記三日間に参加できる方●参加費=一般2,000円、高校生以下1,000円●募集人数=5名(先着順)
【共通事項】申込方法は①申込書に必要事項を記入の上、窓口に持参かFAX(0532-55-8192)②劇場ホームページの専用申込フォームより申込み。

ダンス・レジデンス2019

11/30 [土] 14:00～16:30
スペースノットブランク ワークショップ
「記号と動きを往復して自己と他者のダンスを知る」
●講師=スペースノットブランク(小野彩加、中澤陽)●会場=PLAT創造活動室B●対象=中学生以上●参加費=一般1,000円、高校生以下500円●募集人数=10名(応募多数の場合選考)●申込方法は①申込書に必要事項を記入の上、窓口に持参かFAX(0532-55-8192)②劇場ホームページの専用申込フォームより申込み。



平田オリザが語る「転校生」

聞き手 中島晴美
穂の国とよはし芸術劇場 PLAT シニアプロデューサー

中島——『転校生』を書こうと思ったきっかけを。
平田——24年前の青山円形劇場フェスティバルに、女子高生というテーマの依頼で書き下ろしました。女子高生という存在自体が不条理なところがあって、世間からは「女子高生」という括りのイメージで見られていて、でも一人一人は全然違って、今の自分に満足せず、生に対する不安、女性の社会進出も今ほどではないから、自分のキャリアをどう積んでいくか全くわからない、不安定な状態ですよね。そういうものを書きたかった。カフカの『変身』が下敷きで、原作は朝起きたら虫になっていた男とその家族の物語です。こういうものを不条理劇と言う。たとえば、私は2013年に高校演劇の全国大会の審査員をしたのですが、この年は不条理系のお芝居が多かった。前々年の2011年3月11日の東日本大震災の津波で、生き残った人と亡くなった人を分ける理由は何もない。努力したから生き残れたわけではなく、偶然生き残ってしまったわけです。当時の高校生にとって、東北にいても、なぜあの人たちが死んで自分たちが生きているのか、という答はなかった。

カフカは1920年代にたくさんの作品を書いたが、有名になるのは第二次世界大戦後。有名にしたのは、フランスを中心にしたユダヤの哲学者や作家たち。1945年の時点でユダヤ人たちは強制収容所、労働所、ガス室に送られ、やはり生き残った理由は何もなかった。

私たちは明日朝起きたら虫になっているかも知れない、というように私たちの生きる根拠というのはない。私たちはあっけなく命を奪われてしまうかも知れない存在で、それを描くのが不条理劇。

中島——この『転校生』の時代よりも女子高生はもっと不安な時代を迎えたと思うのですが。

平田——まだ神戸の震災も、東日本の大震災も、オウム事件よりも前なので、日本はまだ無邪気

だった。一度に何千人の人が死ぬとか、テロによって何十人が死ぬという経験を戦後50年全くしてなかったが、この30年で嫌というほど経験した。バブルははじけたけど幸せな国だと思っていた。その幻想が壊れて、特に女性の場合は立ちが大きくなっていると思う。今、高校の生徒会長は女子が多いが、国会議員や社長は男ばかり。ゆがんでいる。お母さんたちのイライラを見て育つので、状況はもっと深刻になっている。だから『転校生』の上演がこんなに続いていると思います。

中島——読み書き、話す聞くができないこと、それは今でも変わっていませんか。

平田——多分変わらなくて、ただ社会の要求が高まっている一方で、育つ環境は少子化や情報化でコミュニケーションがいらぬ方向にどんどんなっている。どうしても学校や文化施設で補う時代になってきた。そのとき演劇の役割が非常に大きくなっています。

中島——英国では中・高校の国語の教科書に詩や戯曲が多く掲載されていてシェイクスピア戯曲も必ず学ぶのですが、日本はそれが無い。

平田——大学でアートマネジメントという、社会における演劇や芸術の役割を教えているのですが、よく言うのは、チケットを買って演劇を観に行くのは特殊なこと、近代に入ってからできたシステムです。もともと演劇は、お祭りとかで上演され、タダでみるもの。お祭りの日に見物があって人を集め、それで運営していた。近代劇場のシステムは、17世紀くらいから大きな都会で生まれた特殊なもので、たぶんなくなっていく。特に日本はチケット代が高い。名古屋だと7000円くらいしますよね。ヨーロッパだと2000円、高校生で500円くらいです。劇場ごとに会員制度があり、年間パスポートがある。年間の会費で入るから、もったいないからと何度も行く。1回ごとに7000円払ってつまらなかったら悔しいが、年間で見ると

面白いものもあればつまらないものもとれなりに楽しめる、というのが本来の楽しみ方。日本は個々の作品で採算をとるので、有名人を出さないとチケットが売れない悪循環になる。ヨーロッパでは劇場のプログラムを信用して「劇場に」お客さんが付いている。そういうシステムに変えないと、演劇は生き延びられない。そういうことを教えたり考えたりするのがアートマネジメントという学問です。
中島——新しい大学にも、その学科は入りますか。

平田——2021年の4月に、兵庫県豊岡市に日本で初めて公立大学で、演劇やダンスが本格的に学べる大学ができます。ほくはその学長になります。演劇をやるだけではなく、演劇について考える習慣を身につけ、それをどうやって社会に活かしていくかを考える。韓国では演劇を学べる大学が95あり、人口の比率でいえば日本の20倍。これが韓流ドラマや韓国映画を支えている。大学では伝統芸能も学ぶから韓流スターは基礎がしっかりしていて現代劇も時代物も両方出られる。ヨーロッパの演劇の学校や大学は、例えばハムレットを演じるためにフェンシングも正式な科目として習う。

日本は民間で俳優を育ててきたから、その役についたら場当たりに習う。だから俳優に厚みができない。日本は民間が強かったから、どこにかやってきたが、国際標準はとうではない、自分をマネジメントできないと国際的に活躍できない。世界中で国立の演劇学校や、国立大学に演劇学部がある。日本の俳優が勝てるわけない。ほくは日本の演劇を世界標準にした。

中島——今回のバージョンで期待することとは。

平田——のびのびやってもらえませんが、4カ月近く作品と向き合うので、そのことを通じて演劇や、自分たちが生きている、生き残っているというのはどうしたことなのかと、作品を通じて考える習慣を身に付けてもらえるといいなと思います。

撮影:萩原ヤスオ

SUPPORT

知識製造業
三遠機材株式会社
http://www.san-en.co.jp

Gallery 48
呉服町48 TEL.54-4848

魚伊 有限会社 魚伊
電話 52-5256

株式会社 竹尾建築設計事務所
代表取締役 竹尾 誠
豊橋事務所/豊橋市平川南町91-2 千440-0035 Tel.0532-62-1331(代) Fax.0532-62-1332
浜松事務所/浜松市東区流通元町13 千435-0007 Tel.053-422-3628(代)

グロリアンピアノ地域特約店
白羽楽器 株式会社
電話053-464-3015

竹内産婦人科
産婦人科 婦人科(不妊治療)
豊橋市新本町23 (豊橋市西産婦人科) 電話053-52-5256

ケンチク 701
KURONO ARCHITECT STUDIO
y.qlo0170@gmail.com

うつ、統合失調症、精神遅滞、発達障害、脳梗塞、人工透析、人工関節など
豊橋・豊川障害年金相談センター
初回相談無料 ☎0120-891-498
豊橋市花中町 160-9 障害年金専門社会保険労務士 竹下英司

看板広告 アラキスタジオ
豊橋市上伝馬町16 電話52-5586番

本と文具なら
精文館書店
TEL.54-2345

ONOCOM なければつくる
株式会社オノコム

外科・内科・胃腸科・麻酔科・肛門科
医療法人栄真会 伊藤医院
豊橋市小池町字原下35 電話45-5283(代)

創業文政年間
数きく宗
豊橋市新本町40 電話52-5473番

調理と製菓のおいしい資格。
豊橋調理製菓専門学校
豊橋市八町通一丁目22-2 TEL.53-2809

豊橋銀行協会 (順不同)
三菱UFJ銀行 みずほ銀行 静岡銀行 名古屋銀行
三井住友銀行 三井住友信託銀行 清水銀行 第三銀行
十六銀行 愛知銀行 中京銀行 大垣共立銀行

創業江戸 御茶席菓子専門店
若松園
御菓子司

西村能舞台
豊橋市上伝馬町
代表 西村 能
Mail=nnbutai@gmail.com

気まぐれコンサート
事務局/0532-62-9259(小川恵司)

安心安全な地下駐車場
パ-ク500
ソウの親子の看板の目印
プラット主ホール・アトスペース公演等へのお客様は30分150円を30分100円(上限4時間まで)に割引します。

整形外科・リハビリテーション科・リウマチ科・麻酔科
医療法人 塩之谷整形外科
理事長 塩之谷 昌 院長 塩之谷 香 副院長 市川義明
豊橋市植田町関取54 電話0532-25-2115(代)

豊橋名産 **舟ちくわ**

井上皮膚科クリニック
診療時間 月・火・木・金 10:00~13:00 16:00~19:00
土 10:00~14:00 休診日=水・日・祝
電話0532-55-7007 愛知県豊橋市向山町字中畑13-1マイルストーン1F

プラス・ワンの付加価値をお客様に提供いたします。
共和印刷株式会社
豊橋市小池町36番地の1 TEL46-3281 FAX46-3285

整形外科・皮膚科・リウマチ科・リハビリテーション科
医療法人 大岩整形外科・皮フ科
院長 大岩俊久 豊橋市大橋通二丁目115 電話55-2100

伝統的工芸品豊橋筆
書道用品専門店
高誠堂
豊橋市呉服町四拾四番地 電話52-5514

ほん せん どう
本の豊川堂
本店・カルミア店・アビタ向山店・プリオ豊川店
セントファール田原店・さきしまグローバルゲート店

ISO9001 ISO14001 愛知ブランド企業 認証・認定取得
株式会社 三光製作所
三光精密工業株式会社
豊橋市佐藤一丁目12番地の3

Storyteller tells the Story
物語コーポレーション

生活にファインクオリティ
sala

広告募集

TICKET CENTER

チケットの購入・お問合せ
プラットチケットセンター
電話・窓口
0532-39-3090 [休館日を除く10:00~19:00]
オンライン
http://toyohashi-at.jp [24時間受付・要事前登録]

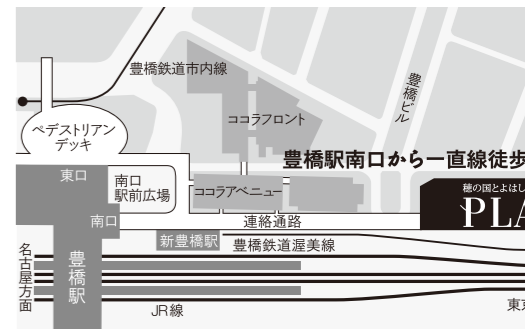


プラットフレンズ募集 入会金・年会費無料

特典
1 公演情報をメールでご案内します。
2 インターネットでチケット予約ができます。
3 主催公演のチケットを一般発売に先がけてご予約できます。
※劇場窓口またはホームページから登録いただけます。

U24・高校生以下割引のご案内

ほぼすべての財団主催公演に、若い人にお得な料金を設定しています。
料金
U24[24歳以下対象]:公演ごとに指定する席種の半額
高校生以下:一律1,000円
購入方法
各公演の一般発売初日から窓口にて取扱い。
その他
本人のみ1公演につき1人1枚。枚数限定。
座席の指定はできません。要・入場時身分証明書提示。



〒440-0887 愛知県豊橋市西小田原町123番地
電話=0532-39-8810[代表]
開館=9:00~22:00 休館日=第三月曜・年末・年始。
第三月曜が祝日の場合はその翌平日。
豊橋駅(JR東海道新幹線、東海道本線、名古屋鉄道)、
新豊橋駅(豊橋鉄道渥美線)直結。豊橋駅南口から徒歩3分。
※駐車場はありません。公共交通機関をご利用いただくか、
お近くの公共駐車場等をご利用ください。

穂の国とよはし芸術劇場 PLAT